

日英語の可能表現

——「なる」、「らる」と can を事例に ——

黒 滝 真理子

1. はじめに

「できる」という概念，換言すれば可能という考え方は，人間をはじめとする生物において最も根幹をなす概念であるとはいえないだろうか。この思いや概念がなければ人間のみならず生物は存在していけないと考えられる。我々にとって，文化的背景を問わず，この普遍的かつ根本的概念であるはずの可能は，当然のことながら言語によって多様に表現される。

例えば，英語の can は必ずしも日本語では可能を表す「できる」と解釈されるとは限らない。英語の can の対訳には「なる」が用られたり，「のだ」「の」「わ」という終助詞で言い切る場合もある。あるいは，文脈によっては，明示的に表現されないことすらある。すなわち無標識というわけである。従来，この言語現象に関しては，can が能力・許可・可能性といった多義性を備えているからというような説明がなされてきた。ただ，これでは，「できる」以外で日本語訳されるのは何故なのかという疑問が残る。加えてこの日本語訳が妥当であるとの説明的必然性も見出せない。また，この問題は語用論的に解釈されているともいわれてきた。しかしながら，全てが語用論で解決されているのだろうか。もっと説得力のある説明がなされなければ，この問題の解決に迫ることは困難であろう。

一つの解釈として，次のようなことが考えられる。日本語の自発を起源とす

る状況可能は「なる」との親和性が高い。「なる」は主観的把握を代表する表現である。主観的把握型言語では、「自己のゼロ化」(池上1999)が起こり、主語が場・状況として表現される。よって、日本語の可能はある状況下で事態が起こり生じたことで状況全体が変化し得ることを含意している。その際、主体が背景化されるから、色々な文末表現で解釈されると考えられる。

ラネカーの認知文法において、英語の法助動詞 can は、グラウンディング要素として、事態の発生を非現実位置付けるものとされている (Langacker2008, 2009)。すなわち、英語において可能を表す can は非現実として捉えられ、命題外のモダリティと位置付けられるのに対し、日本語の可能は動作の遂行に向けて、より現実的なものとして捉えられ、命題内の要素として位置付けられる。例えば、日本語の「られる」は、可能のほかに受身や自発の機能・用法を持ち、命題内のヴォイスに関わる構文である。日本語学でも従来、日本語の可能はモダリティとして扱われてこなかった。本稿では、その点についても触れてみたい。

そして、可能という普遍的な概念は、我々の心的経験に基づく認知能力によって概念化され、使用言語によって異なる形式と結びついて言語化される。可能の概念をどのように言語化するかは言語によって異なっているのである。従来、日英語の可能は同じ土俵で捉えられてきたが、実は通時的にみても発達経路が異なっており、それにより異なる様相を呈している。本稿では、日本語の可能と英語の可能が異質なものであることを通時的観点よりもむしろ共時的観点から考察する。さらに、日本語は自発由来、すなわち「行為者の意志が無く、自ずからなる」から派生したという点で、構文の面からのヴォイス¹が際立つ可能であるといえるが、一方、英語の可能は意味の面からのモダリティが際立つ。日英語の可能がモダリティ(ムード)とヴォイスという異なるカテゴリーに属していると考え根拠を説明する。その上で、可能が日英語でどのように概念化(意味化)され、どのように言語化されるかをみることで、日英語の可能の捉え方の異同が認知様式や主体の現れ方の相違に反映されるということ論じていく。

2. 英語の可能表現

- (1) In awkward situations, each person expects the other to defend himself, and to present his own arguments as clearly as possible. The information that they get in this way *can* then be used as a basis for reaching a mutual decision or agreement.

（厄介な事態に陥った時，当事者は各々相手が自分を弁護し言い分をできる限り明確に伝えることを期待する。このようにして得られた情報は，その後，共通の結論や合意に達するための基礎として使われることになる。／使われるわけなのだ。）（下線は筆者による。）

（Polite Fictions in Collision 2004:63）

英語で可能の典型と言えば *can* であるが，例(1)のように，英語の *can* に対応する日本語は必ずしも「できる」ではなく，多様であり，モダリティ以外の文末形式で表されたり，場合によっては無標識であったりもする。

まず，*can* の多義性について述べよう。*can* の通時的発達過程を辿ると，元来「やり方を知っている（=to know how to ~）」という意味で mental ability を表す本動詞の *cunnan* であったが，古英語後期に physical ability を示す “be able to, have power” の意味の能力可能を派生し，中期英語期になって root possibility（状況可能），近代英語期に permission（許可）の意味が生じた。このプロセスこそが，*can* に多様な解釈をもたらした所以である。英語の *can* には恒久的能力を表す普遍的な可能と，動作が遂行されるための外的条件が整っているからこそ可能になるといった個別的な可能がある。前者を能力可能 (ability)，後者を状況可能 (root possibility) と呼び，能力可能がプロトタイプであるから，能力由来といえよう²。

root possibility とは，Nehls (1986) が “most examples of ambiguity of *can* involve ambiguity between permission and possibility due to external circumstances.” (Nehls 1986: 105) というところの ‘external circumstances’，すなわち状況可能³を表している。行為者の能力・属性以外の状況に行為が成し

得る要因を求めているというわけである。

Ehrman (1966) も、状況可能に関して、以下のように「主語の行動の自由を妨げるものは何も存在しない」と説明する。

The basic meaning of *can* is that there is no obstruction to the action of the lexical verb of which *can* is an auxiliary; that is to say, that action is free to take place. (Ehrman 1966:12)

すなわち、「何かをしようと思えば、その実現を妨げるものは何も存在しないので、自由にそれができる」というように、外的に妨げるものがないことを示すというわけである。

(2) I *can* see you tomorrow. (明日お目にかかりましょう。)

= It is possible for me to see you tomorrow. There will be nothing which prevents me from seeing you tomorrow.

(『ジーニアス英和辞典第3版』:265)

(2)の例は、「会うという行為を妨げるものは何もないのでそれができる」というような状況可能を表す。この *can* は I の能力に言及しているのではなく、申し出や提案を表している。このように、状況可能は「語用論的強化」⁴によって動機づけられ、例(3)のように多様な発話の力を発する。

(3) a. *Can* you wait a minute, please?

(ちょっと、待っていませんか。：依頼)

b. *Can* I give you a ride to the station?

(駅まで車で送りたいでしょうか。：申し出・提案)

c. You *can* do exercise 10 for homework, everybody.

（みなさん、宿題として練習問題10をやっておきなさい。：指示）

（『ジーニアス英和辞典第6版』:303）

英語やドイツ語は能力可能と状況可能を同一の形式で表す多義であるが、言語によっては能力可能と状況可能の対立がみられる。例えば、フランス語では *savoir*（能力可能）と *pouvoir*（状況可能）という対立が見られる。状況可能の *pouvoir* から語用論的強化によって、許可（～してもいい）や依頼（～してくれる？）の意味が派生する。中国語は能力可能が“会”や“能”，状況可能が“能”や“可以”である。ただし，“能”は両者の可能を表す。

日本語（標準語）は英語やドイツ語と同様、形式上この2つの用法を区別しないが、興味深いことに、日本語の各地域方言では積極的に両者を区分する現象がみられる。例えば、関西方言（近畿）では、「よう読まん」が能力可能、「読めん」が状況可能というように、地域によって2つの可能に対し異なる表現を使う。渋谷（2006:67-89）にも、青森では能力可能の「きれね」と状況可能の「きらえね」、福岡では能力可能の「ききらん」と状況可能の「きられん」、長崎では能力可能の「きーえん」と状況可能の「きられん」と区別されていることが述べられている。

3. 日本語の可能表現

日本語で可能を表す接辞は(4)のように多様性に富んでいる。

(4)①助動詞「る」「らる」「れる」「られる」を後続させる。

②動詞＋「得（う）る」「得（え）る」で「読める」「書ける」のような複合動詞となる。

③動詞に「ことができる」／動作名詞に「ができる」を後続させて従属節化する。

④動詞＋「ことをう」／動詞＋「をう」

⑤動詞+「こと能う」

⑥「かねる」

⑦「なる」

(4)①の「る」「らる」「れる」「られる」は、可能の他に受身・尊敬・自発などの多機能があり、時として判別不可能になる場合もあることから、助動詞「ら」が脱落した形態、いわゆる「ら抜き可能形」が現われ、可能動詞として分離独立させる傾向にあった。

現代語では、以下のように、「ら抜き可能形」が可能動詞として分類されていて、この「ら抜き可能形」の出現によって、可能を表す「える」という形式が勢力を増していき、その使用頻度はかなり高い。

五段活用動詞

kakareru (書かれる) → kakeru (書ける) → kakereru (書けれる)

(ラ) レル ら抜き可能形 二重可能形

上・下一段動詞，カ変動詞

kirareru (着られる) → kireru (着れる) → kirereru (着れれる)

(ラ) レル ら抜き可能形 二重可能形

自発にも「春の訪れが待たれる」「父の身が案じられる」のような「られる」形がある。「食べられる (tabe-rare-ru)」などは文脈によって受身にも可能にも捉えられる。「られる」は可能にも自発にも受動にも使われるのである。このような「られる」は、「ある出来事をどの立場から表現するかということに関わる文法カテゴリー」(庵2012:98)、すなわちヴォイスといわれる。これらも、英語では一般的にモダリティの can で表現される。

よって、英語の can はモダリティと位置けられてきたが、日本語の「られる」は自発・可能・受身・尊敬など多様な意味・機能を担い、ヴォイスのカテ

ゴリーに属しているというわけである。この点に関しては、第5節で詳述する。

4. 日本語の自発由来の可能

「らる」は元来自発を表していたが、やがて可能形式へと変化していった。自発が可能に変化していった言語事象を、渋谷（2005）は「自発形式の種類が多様である点に日本語の特徴がある。日本語の可能表現の内部では状況可能＞能力可能＞心情可能といった変化の方向が観察され、通言語的に指摘されている能力＞状況といった方向とは異なっている。このことは日本語の可能形式が動作主体の外部に行為実現の条件を認める自発形式を起源とすることと関連するのかもしれない」（渋谷2005:43-44）と説明する。

また、「らる」の史的変遷を渋谷（1993:148-153）は以下のように述べている。「（ら）る」に関しては、院政期以降、動作主体の意図的な働きかけなしに、「非意図的に／自動的に／他力によって動作が実現（成就）する／しない」を表す「自発」の意味を表す助動詞であったが、それが中世に至るまでに可能形式に変化した。上代や中古において元来自発形式だった「（ら）る」の意味領域が、遅くとも院政期以降に可能形式の一つであった副詞エの意味領域に浸入していき、副詞エの衰退を招くにいたった経緯があるという。つまるところ、「らる」の多義性は自発から可能へと発達する過程に生じたものといえよう。

自発は動作主の意志が無いにもかかわらず、行為遂行に向けて推移・変化することを表す。まさに池上（1999）のいう〈なる〉的言語（BECOME language, BE 言語）と相通ずる。認知主体の現れ方の差異から認知類型論的な対立が次のように論じられている。〈なる〉的言語とは、表現される事態を全体として捉え、そこに動作主として人間が関与していてもなるべくそれを際立たせない傾向のある言語のことである。一方、英語のように、事態に関与し動作主として行動する人間に認識上の重点を置き、それをとりわけ際立たせるような表現形式をとる傾向のある言語を〈する〉的言語（DO language, HAVE 言語）と呼ぶ。

動作主の働きかけがないこと、つまり自ずから然ることを示す自発は「な

る」と「出来（しゅったい）」で表されてきた。動作主の働きかけこそはないが、時間の推移に伴って変化していく過程を話し手が体験的に捉え、「実がなる」のような表現が派生する。日本語は自発を表す表現が多様であるが、自発のプロトタイプは「なる」である。「なる」は江戸語期全体を通して使われていたが、とりわけ江戸時代から明治・大正にかけて可能表現としてかなりの勢力をもっていた。

「なる」は「もともとなかったものが新たな形をとって現れ出でるという、自発的な自然発生現象を表す出現動詞であった」と米倉（2013:99）はいう。「そのようなことはなるまいぞ」「ならぬ堪忍するが堪忍」のように「なる」の中核的意味は「自発」「自然展開」、さらには「出来」を表している。『日本語文法大辞典』（2001:579）には、「なる」の語義に関して「現象の推移変化を表わす語であると言えよう。そして、結果として現れた事柄によって、希望していたことの実現、しとげる、できるなどの可能の意味が派生する」と記されている。その事態が実現し出来る条件には、実現を望んでいる動作であることが必要であり、それによって可能になるのである。すなわち、「望んでいたことが実現する。思いがかなう」という意味は「望んでいたことが動作主の意志的な働きかけの有無にかかわらず実現する」、「話し手自身による行為であっても、自然発生的に事態が出来る」というように可能をも示す。「なる」から「可能」、そして「できる」に変化していったことがうかがえる。例えば、「あいつのことは信用ならん」は「信用することができない」「信用するわけにはいかない」というように不可能、つまり「可能でないこと」を表している。

この「なる」の特徴は、認知主体が明示されず、認知主体を事態、すなわち状況・場に埋没させることである。たとえ話し手による行為であっても、あたかも自然発生的に状況が出来ることを表現する。あるいは、事態の出来や変化に気づいたことを表現したり報告したりする。「なる」の本義である「成」を使った「成し遂げる」は可能に通ずる。「出来る」は「出来る（できる）」を含意し、これもまた可能に通ずる。この可能は自発由来の状況可能が多く、「なる」同様、認知主体が状況・場に埋没され、「自己のゼロ化」が起こってい

る。主体が背景化されることで、語用論的に色々な文末表現で表されるのであろう。例えば、「こちら、生ビールになります」のような「なります敬語」もその一例である。因みに、これを英語で表現すると “You *can* have draft beer.” が自然となろう。

「成」が可能を表している証左として、(5)の例文で「也」が *can* の過去形 *could* で表されている。

- (5) 先づ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。(芭蕉『奥の細道』)

We first climbed up to Palace-on-the-Heights, from where we could see the Kitagami, a big river flowing from Nambu. (D.Keene 訳)

(池上2006:193)

中世になると、「なる」は「ことなる」の形で可能表現として用いられていく。申(1999)によれば、「ことなる」は「ことができる」が現われる以前から可能を表していたという。両者とも状況可能を表していて、とりわけ「ことなる」の「なる」はもっぱら否定形で使われていた。例えば、当為表現(せねばならぬ)、禁止表現(してはならぬ、することはならぬ)のような形で多用されていた。

- (6) 思ふことならで、世中に生きて何かはせん(竹取物語(9C末-10C初))

(6)は「思ふこと」の実現に動作主体の意志的動作は想定されず、神などの外的条件がその実現をもたらしていることから、この「なる」も状況可能といえる。

このような「ことなる」の衰退とともに伸張を見せ始めた「ことができる」は明治の東京語では能力可能としても用いられることが多かった。明治以降「ことなる」で表される可能表現はほぼ姿を消していった。つまり、状況可能を表す「なる」は能力可能にまで発達せず、発達途上にあったといえよう。

渋谷(1993:101)も、「なる」と「できる」の通時的変化は、「できる」が伸

張するとともに「なる」が衰退し、可能表現としての「できる」が確立し始めたと指摘している。「なる」は江戸後期から化政期以降になって分析化、形式の透明化がおこり、意味の分化と表現の専門化が起こった。自発表現においても後部要素「なる系」から「いく系」への交替が起こり、「なる>してならない>いけない」となったという。その一方で、可能の「なる」が「できる」と入れ替わったのである。言語変種の観点から、日本語の鹿児島方言も「読んがなっ（読むことができる）／読んがならん（読むことができない）」というように、「なる」が可能の「できる」を表すと指摘されている（松田2009:99）。

「自発」が「可能」に拡張される際には、「意図・意志」を持つ動作主の存在が概念構造に組み込まれる必要があると米倉（2013:107）が述べている。これは「概念主体が状況の中に埋没される」という主観的把握型の日本語母語話者の根本的な認知様式を暗示している。日本語の可能は、動作主の意図や意志が主体的に働きかけることで行為の実現を可能にする能力可能というよりも、状況可能で使われることが多い。状況可能とは、行為者の能力・属性以外の外的状況が許せば起こり得る可能のことであり、意図や意志を持つ動作主が関わる必要はないので、動作主は背景化される。すなわち、米倉（2013:107）のいうところの「意図・意志」を持つ動作主の存在が概念構造に組み込まれ」ていないというわけである。

(7) a. 彼女は中国語が話せる。(能力可能)

b. 今日は快晴なので、ここからでも富士山がみられる。(状況可能)

(7) a の能力可能は潜在的 (potential) な可能ゆえ、時間的に限定されていない。だからこそ、動作主が主体的に働きかけることで「中国語を話す」ことが実現するのである。一方、(7) b の状況可能は、状況によって現実化される。その状況が特定の、限定的な時間をつくる場合もある。

基本的には、日本語母語話者は可能の概念を「自然な成り行き（自然展開）の結果、自然発生的に可能になる」と捉える傾向にある。それに対し、英語母

語話者は「動作主の意図や意志により主体的に働きかけることで行為の実現を可能にする」と捉えている。これも、池上（1981）の「日本語が〈なる的〉言語であり、英語が〈する的〉言語である」という説に通底する。前述したように、日本語の場合、ある事態が可能になると、自然の成り行きの結果として「現われいずる」、それが進化して「できるようになる」となる。江戸後期の「できる」が可能表現化した過程を述べておこう。例(8)のように、「できる」は「自発的に何かが現れてくる（出来）」の意味をもつ「いでくる」（カ行変格活用）を起源とし、「でくる」（カ行変格活用）、そして江戸時代になると可能を表す「できる」（上二段活用）へと変化していった。「いでくる」は「無かったものが新たに生ずる」という自発を含意していた。自発と可能が相俟って言語変化してきたことがうかがえる。

(8) 倉橋の山を高みか夜ごもりに出で来る月の光乏しき

（『万葉集』 卷三・二九〇）

日本語母語話者はいにしえより自発という概念を認知的基盤としていた。即ち、他動詞が発達している英語の母語話者は「主体的働きかけ」に焦点をあてるのに対して、自動詞が発達している日本語の母語話者は自然展開的に起こった眼前の事象を〈いま・ここ〉の視点から見ている。日本語の可能表現は他動性が低いために、命令文や使役文では使われないのも自ずと理解できよう。

第2節でも述べたように、動詞 *kunnan* から派生した *can* は、元来「やり方を知っている」を表し、「動作主が積極的に働きかけて知る」を含意し、主体が前景化されている。一方、日本語は概念主体があくまでも状況の中に埋没されているので、自然発生的に主体以外に行為の実現を委ねる。

また、英語の *can* は能力可能がプロトタイプであるから、能力可能の表す能力や力量をまず概念的に捉える。一方、日本語の可能は自発由来で、状況可能がプロトタイプである。自発由来であるから、行為者の働きかけもなく、自然発生的に実現の可能性を行為者以外に委ねる。その意味でも状況可能といえ

る。これが行為者に委ねるとなれば能力可能になってしまう。つまるところ、日英語の可能は通時的にみても共時的にみても異なるということになる。

5. 日本語のヴォイスとしての可能

従来、日本語文法において可能がどのように位置づけられてきたかを調べてみると、助動詞の「受身・自発・可能・尊敬」という項目の中で取り扱われていた。しかしながら、現代語の文法書では可能表現の扱われ方は多様で、概して、形式的・統語的に捉えるヴォイスとしてのカテゴリー化が浸透している。ヴォイスとは「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」と寺村（1982）がいうように、意味的な面よりも形式的な面の方が重視されている。よって、自発も可能も文法的な「態」として「自発態」や「可能態」というように位置づけられているのである。

可能なぜヴォイスのカテゴリーに属しているかを以下に述べていきたい。

まず、「読める」と「読むことができる」について格シフトが起こる現象をみてみよう。「読める」は第3節の(4)②動詞+「得（う）る」「得（え）る」というように複合動詞になるパターンで、「読むことができる」は(4)③の動詞に「ことができる」／動作名詞に「ができる」を後続させて従属節化するパターンである。

従来可能構文の格パターンに関してはヴォイス構文としての特徴をもつとされてきた。「読む」や「話す」は「読める」や「話せる」のように五段活用動詞に *eru* がつく形で可能を表す。

(9) a. I read the book written in Latin.

私はラテン語の本を読む。

b. I *can* read the book written in Latin.

①私はラテン語の本を読むことができる。

②私はラテン語の本が読める。

動詞基本形の「～を読む」と「～が読める」では、「ヲ格」と「ガ格」で格シフトが異なっている。「本」は他動詞「読む」の目的語なので、(9)bは「ラテン語の本を読める」が普通である。ところが、「読む」ではなく「読める」となると、(9)b①の「ラテン語の本を読める」よりも、(9)b②の「ラテン語の本が読める」の方が自然なのである。因みに、「読める」は、「読み得る」(yom-i-eru)の母音の脱落によって縮合が生じ「yom-eru」に転じた結果である。これらの点からも、日本語の「可能」は意味というよりも構文現象に関わっているのでヴォイスといえよう。

ヴォイスとしての「られる」を使った「彼女の話し方に知性が感じられる」の例では、「彼女の話し方に知性を感じることができる」という可能の意味の他に、「知性を自然と感じる」という自発の意味にも解釈できる。さらに使用頻度の高い「見える」や「聞こえる」となると、(10)のように自発か可能の解釈が曖昧になりやすい。

(10) a. 窓から海が見える。

①自発：視界に自然と入ってくる。

②可能：見ることができる。

b. 鳥のさえずりが聞こえる。

①自発：自然と耳に入ってくる。

②可能：聴くことができる。

「見える」や「聞こえる」の場合、動詞そのものに自発の意味が備わっているが、「感じる」は動詞自体に自発の含意がないので、「自発」の意味を備えた「れる」「られる」の助けを借りて「自発」の意味を表そうとしていると、山口(2016:158)は説明する。山口は、「名詞+が+～できる」は「名詞+を+～する(他動詞)+られる」に由来するという。このことから、日本語の「できる」は元来「自然に出来る」であったことがわかる。

「られる」自体に可能・受身・尊敬のほかに自発の意味があるという点では、

「彼と歩いているところを見られた」や「電車の中で財布をとられた」のような受身も「自ら制御不可能な事態が自然に出てくる」という自発から意味拡張したものと考えられる。概念主体の意志で実現する、つまり主体という個体の動作として捉えるのではなく、事態全体が自然に出来し、全体として変化することを表すという意味で、日本語の受身は自発由来の可能の概念に非常に近いといえよう。

「できる」の変化の過程については第4節でも触れた。渋谷(1993:148-153)は、18世紀半ばに「できる」が「することができる」となり、19世紀初頭に「漢語+できる」となったという。前述したように、日本語の「できる」も「いでくる→でくる→できる」と発展した自発由来なのである。「いでくる」は、無の状態から自然発生的に生じるといった自発を表している。重要なことは、出来や自発を表す場合、主体は事態が起こる「場」の中に埋没され、背景化されるということである。

尾上(1998:82-83)も「日本語では事態を(個体の移動や変化として捉えるのではなく)全体として発生、生起したものとして語る(=事態全体の出来として語る)という方法をとる」と述べている。尾上は受身文も事態全体の出来を語る文(出来文)と捉えている。例えば、「猫にネズミが食べられる」とは「猫においてネズミを食べることが起こる」ということである。同様に、日本語の可能も「主語を場として事態全体の出来と捉え、やろうと思えばやれる(が、まだやっていない)」というように非現実のことを暗示している。例えば、「私は牡蠣が食べられない」というと、「私」を場として「牡蠣を食べる」ということをやろうと思えばやれるというように事態(コト)全体として捉えている。(9)bの例に尾上の説明を援用すると、「私に置かれた状況(場)において、ラテン語の本を読むという事態が出来する」を表していることになる。

(9)の「読む」は他動詞であり、(9)bは「何かを読むことが可能である」であるから、(9)b①のように「ラテン語の本を読むことができる」が妥当なように思われるが、実際の使用においては(9)b②の「ラテン語の本が読める」の方が自然であり使用頻度が高い。この「ガ格」はまさに話題(Topic)や新情報で

あることを示す助詞である。「形式が異なれば、意味も違う」という公理にあてはめると、「ラテン語の本が」と「ラテン語の本を」では表す意味が異なるということになろう。「ガ+可能形」と「ヲ+可能性」の2パターンが存在するのは他動詞に限ることであり、自動詞の場合には「ガ+可能形」となる。これは、「ガ+可能形」の方は自然に事態が起こるという自動詞的意味を表し、自発を含意するからである。事実、「ガ+可能形」の場合、「自然に」「偶然に」「無造作に」といった自発を含意する副詞と共起しやすい。一方、人為的に発生した事態を強調したいのであれば「ヲ+可能形」が有効ということになろう。

(11) 明るい陽射しも入ってきたので、本が読める。

(11)の「読める」の可能はその動作が可能であることの条件が動作を取り巻く状況内にあることを示す状況可能であり、認知主体が背景化され場の中に埋没され、その場や状況の中で許容されている事態を示している。それゆえ、「本が読める」の方が自然であり、事態全体で捉えている。荒木（1983）も「『可能』が他律的に没主体的に与えられるものである。その心を「れる」「られる」という助動詞に込めているのである」（荒木1983:22）と説明している。

以上、英語の can で表される動作主優位の可能と、日本語の自発由来や状況可能由来の可能とは本質的に異なることがわかった。すなわち、能力があるゆえの個人の主体性や責任の問題までを含意する英語の可能と、日本語の「ラテン語の本が読める」のような自発優位の可能とは異質なもののなのである。英語の個人の主体的行動から発せられる可能と日本語の自発由来の可能とは等価でないということである。よって、認知主体が不在で自発由来の日本語の可能や非意図的・自然発生的な〈なる〉に対し、意図性（意志性）をもつ動作主が関与する英語の can は全く異なる可能を表している。この異同の要因の一つとして、日本語の自発由来の可能と能力由来の英語は意味変化の経路が異なる点が従来あげられてきたが、もっと根本的な違いがあることを以下で述べよう。

佐久間（1941:214）も「日本語ではとかく物事が『おのずから然る』やうに

表現しようとする傾向を示すのに対して、英語などでは『何者かがしかする』やうに、さらには『何者かにさうさせられる』かのやうに表現しようとする傾向を見せてある,,,,,」というように日英語の特質に触れている。黒滝（2022）でも「日本語は、主観的把握の傾向が強く自己を場の中に埋没させる捉え方をする傾向にあり、状況可能の状況とは「場」や「環境」を表しているので、主観的把握の日本語では状況可能が起源となることも理にかなっている。また、能力可能は主体の能力や意志によるので、場というよりも個の問題になる。その一方で、状況可能は動作主の意志性が及ばないという点で〈自発〉とも近い概念を表す」（黒滝2022:100）と論じている。

日本語の状況が許す可能とは、没主体的な可能、自ずと自然の成り行きで生じる可能であることがわかった。「状況可能」というよりも、未だ自発と未分化の状態にあるので、「自発可能」と称した方がよいのかもしれない。

ただ、英語にも状況可能はある。第2節でも述べたように、英語の状況可能は「主語の行動の自由を妨害するものは外部の状況の中には何も存在しないので、それができる」を表し、外的状況が許せば一般的に起こり得る可能性を示す。この外的状況による可能性とは、概念主体が状況の外から働きかける可能、外から状況を眺めて判断している可能である。一方、日本語の状況可能は状況の中に概念主体が埋没されている。その意味で、英語の状況可能を external possibility、日本語の状況可能を internal possibility と称することもできよう。

自発は「そうしようとする意志や何らかの手段・根拠がなくとも自ずとそうなっていく状態」、「動作主体の意図的な働きかけはなく、自然の力などの外的状況によって、動作が自然発生的に実現してしまうこと」を表す。すなわち、動作主体の外部の状況がどう作用するかは自然に決まり、人為は関与しないということである。例えば、自発の「彼はもう帰国したものと思われる」においては、話し手は彼が帰国したものと思ひ得る状況を外界の事象として受けとめている。話し手自身が考える主体となり、外部に行為実現の要因を求めるという点で、自発と状況可能とは本質的に差がない。また、動作主の潜在的能力や意図性の及ばないところで動作や変化が実現していて、状況可能も自発も動作

主は完全に背景化されている。それに対し、英語は動作主が前景化される。このように、日本語は認知主体が背景化されるので、可能表現の格を「ガ格」にすることが自然であると考えられる。

ここで特記しておきたいことは、日本語において可能表現を明示しなくても可能を概念化できるのは、認知主体が前景化されことなく背景化されるからであるということである。さらに言えば、日本語は認知主体が背景化されるため、多様な可能表現と、それに対する多様な解釈が成り立つのである。

従来可能といえば、許可を表わす *may* や義務を表わす *must* と同様、モダリティと連想されてきた。よって、*can* は意味的にみてモダリティのカテゴリーに入る。それに対して、日本語の自発由来の可能は統語関係を示すヴォイスのカテゴリーに入る。可能という同じ名称で表されているものの、異なるカテゴリーに属していることが理解できよう。

6. 可能表現に多くみられる没主体

冒頭の疑問に戻ろう。対訳は文脈によるものであり、忠実に訳されないものであるとはいえ、可能を表す *can* を「することができる」と訳さない場合が多いのはなぜであろうか。それは、日本語の可能は自発由来で、認知主体が背景化されるから、英語の可能を日本語訳すると別の表現で表されたり、無標識になったりするためである。可能表現を使わなくても可能を概念化できるのは、主観的把握型の日本語では認知主体が前景化されないからであると考ええる。

前述したように、自発とは、動作主の意志・意図が無くても、自然に、自動的に行為が生じてしまうことを表す。動作主体が背景化されることで、丁寧さや謙虚さをもたらすといった配慮表現にもなり得る。手紙文などで、「(私は)思う」よりも自発の「(私には)思われる」と書く方が好まれるのは、自ずと浮かんだ考えであることが示される分、説得力が増すのと同時に、配慮が含意されるためである。

ここで、*can* を日本語に解釈する際、概念主体が状況の中に埋没される没主体の言語現象をみてみよう。

黒滝（2022:99）でも述べたように、状況可能は、責任を負うべき動作主が状況の中に埋没され背景化されるため、それに伴い聞き手が前景化され、許可する権限を持つと、依頼などのポライトネス表現としても使われる。

- (12) *Can* you possibly lend me your bike?

自転車，借りられますか。（以下，下線は筆者による。）

(12)は「自転車を貸していただけませんか」という依頼表現である。認知主体の背景化と連動するかのよう聞き手が前景化され、聞き手に行為の主導権をもつよう扱われた結果と解釈できる。聞き手に解釈が委ねられる、いわゆる「聞き手責任」となっている。

- (13) You *can* turn the radio off. We're not listening to it.

ラジオを切ったら。誰も聴いていないから。

（『ジーニアス英和辞典第6版』:303）

(13)では、行為実現に加担する動作主が背景化されることで、聞き手に指示している。指示ではあるが、単なる命令文よりは聞き手への配慮が感じられる。

- (14) 論文を見てほしいと言われていたのに、なかなか見る時間がなくて申し訳なく思われる。

(14)のように、相手の不利になる事態に自発を使うと、動作主が背景化されることで、動作主のかかわりも軽減される分、配慮が示される。

このように、日本語の場合、没主体によって聞き手との非分離、すなわち聞き手との融合が働くのは、状況可能が動作主を背景化し、聞き手を前景化する表れであるといえる。

以上、可能表現を使わなくても可能を概念化できるのは、主観的把握型の日

本語では認知主体を前景化しないことが要因となっていることを論じてきた。すなわち、日本語は認知主体が背景化されることで、聞き手に解釈が委ねられる「聞き手責任」になるため、多様な可能表現と、それに対する色々な解釈が可能となる。無論、状況可能の can の守備範囲が広いという特性もあるが、とりわけ日本語は没主体ゆえに、なおさら色々な解釈が起こり得るというわけである。

7. おわりに

本稿では、可能の下位区分である状況可能を取り上げて、日英語の可能表現を事態把握の観点から再考してみた。英語の can は能力由来の可能で、「動作主が積極的に働きかける」という含意があるのに対し、日本語の可能は、自発由来の「なる」「らる」で表され、「自ずと、自然に出来る」ことを意味する。「自発」と「出来」の関連性は「なる」と「可能」のそれと平行である。

日本語は概念主体が状況の中に埋没される主観的把握型言語であるため、「状況可能」も認知主体が背景化される。〈なる〉的な日本語の可能表現は、概念的には可能として捉えられているものの、敢えて表現せず無標識になる場合もある。日本語で可能を概念化する際、可能表現を使わなくても多様に解釈され得るのは、認知主体が背景化され、前景化することができないことが要因となっている。そして、可能表現においては「ガ格」を使う方が自然であることも、日本語が没主体ゆえに生じる現象であるということがわかった。

日本語は自発由来の可能であるのに対し、英語の可能は能力可能が意味変化した能力由来である。従来、発達経路の観点から日英語の可能の相違が述べられてきたが、より根本的な相違があることを論じた。すなわち、英語は主体が external で状況の外から働きかけ、外的障害物はなく主体が前景化される。一方、日本語は概念主体が状況の中に埋没される internal なものであるので、自然発生的に主体以外に行為の実現を委ねる。

また、没主体によって聞き手との非分離、すなわち聞き手との融合が働くのも、状況可能が認知主体を背景化し、聞き手を前景化する表れであることに触

れた。すなわち、認知主体の背景化と連動するかのように聞き手が前景化され、行為の主導権をもつように扱われた結果である。まさに、日本語が、聞き手に解釈を委ねる、いわゆる「聞き手責任」となっている所以である。

さらに、本稿では、英語の can は形式上のムードではなく意味上のモダリティが際立ち、モダリティとして位置付けられる。一方、日本語の「らる」は自発から派生した可能の他に受身・尊敬など多様な意味機能をもち、文法関係を表す統語的・構文的な捉え方が際立つので、ヴォイスとしてカテゴリー化されることにも触れた。

「やれないことは無理してやらなくてもよい」の「やれない」のような（狭義の）可能動詞や「そのため会社にいれなくなった」の「いれない」ような「ら抜き言葉」などは否定形で現れる頻度が高い。小田（2015）には「不可能と自発は表裏の関係にあって、「できない」とは、自発を打消した姿である」（小田2015:100）と述べられ、自発と可能の境界が曖昧であることが指摘されている。そもそも日本語の可能は自発由来である。その自発の否定は「自然発生的に事態が生じない・起こらない」ではなく、「否定した事態が自然発生的に生じる・起こる」ことを表す。人間にとって自然に起こるという自然の力を否定することは不可能である。自然の流れには身を任せるしかないのである。つまるところ、自発の否定形も自発を表わしているといえよう。この点に関する十全な論究は次稿に譲りたい。

注

1. ヴォイスは形式、モダリティは意味の問題である。モダリティに対する形式はムードと呼ばれるが、本稿では敢えて統一せずに使いたい。というのは、英語の可能表現は意味的なもので、日本語の可能表現は格シフトが起こる点で形式的なものだからである。
2. Declerck (2011) が、can を ability (能力), capability (能力) と opportunity (機会) に分類しているが、この opportunity は root possibility と近似している。Palmer (1990) は dynamic modality (力動的モダリティ) の can を ability (能力) と circumstantial (状況的) と、Leech (1987) や Bybee (1988) は ability (能力) と root possibility と分類している。

3. 状況可能を Radden and Dirven (2007) は ‘circumstantial possibility’ (potentialities arising from speaker-external sources), Narrog (2005) は ‘non-agentive external modality, subject-external (circumstantial) possibility’, Traugott (1989) は ‘possibility in a world independent of the speaker’ と定義する。
4. 話し手がある表現を解釈する際、しばしば語用論レベルで推論を行う。それが繰り返され、慣習化され、語義レベルの意味として定着化していき、最終的に文法機能を担うことがある。この過程を「語用論的強化 (pragmatic strengthening)」という。

参考文献

- 荒木博之 (1983) 『やまとことばの人類学—日本語から日本人を考える』 朝日出版社。
- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』 第2版. スリーエーネットワーク。
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店。
- 池上嘉彦 (1999) 「日本語らしさの中の〈主観性〉」 『言語』 28-1, 84-94.
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚—〈ことばの意味〉のしくみ』 日本放送出版協会。
- 小田勝 (2015) 『事例詳解古典文法総覧』 和泉書院。
- 尾上圭介 (1998) 「文法を考える 5 出来文(1)」 『日本語学』 17(7):76-83. 明治書院。
- 黒滝真理子 (2022) 「可能表現の発達に否定概念は如何に関わってきたか」 『認知言語学研究』 7.93-110.
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』 育英書院。
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」 『大阪大学文学部紀要』 33(1):1-262. 大阪大学文学部。
- 渋谷勝己 (2005) 「日本語可能形式にみる文法化の諸相」 『日本語の研究〈特集：日本語における文法化・機能語化〉』 1(3).32-46.
- 渋谷勝己 (2006) 「第2章 可能・自発」 小林隆 (編) 『シリーズ方言学2 方言の文法』 47-92. 岩波書店。
- 申鉉竣 (1999) 「可能表現における否定主導—江戸語・東京語資料にみる—」 『学習院大学人文科学論集』 8:143-165.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版。
- 松田美香 (2009) 「20 「食べきらん・食べられん・食べれん」はどう違う? 「～できる」にもいろいろ」 九州方言研究会 (編) 『これが九州方言の底力!』 96-99. 大修館書店。
- 山口佳也 (2016) 『「のだ」の文とその仲間・続編—文構造に即して考える』 三省堂。
- 米倉よう子 (2013) 「第3章 言語相対的差異と単方向仮説—可能表現の文法化・(間)主観化—」 『認知日本語学講座第7号 認知歴史言語学』 77-111. くろしお出版。
- Bybee, J.L. (1988) “Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical

- meaning” , *Berkeley Linguistic Society*, 14: 247-264.
- Declerck, R. (2011) *The Definition of Modality*. In Adeline Patard and Frank Brisard (eds.) 21-44.
- Ehrman, M.E. (1966) *The Meaning of the Modals in Present-Day American English*. The Hague: Mouton.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Langacker, R. W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Walter de Gruyter.
- Leech, G.N. (1987) *Meaning and the English verb* 2nd, Longman. London/New York.
- Narrog, H. (2005) Modality, mood, and change of modal meanings: A new perspective, *Cognitive Linguistics* 16 (4), pp.677-731.
- Nehls, D. (1986) *Semantik und Syntax des englischen Verbs*, Teil II :Die Modalverben. Heidelberg: Julius Groos.
- Palmer, F.R. (1990) *Modality and the English modals*, 2nd, London: Longman.
- Radden, G and R. Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, E.C. (1989) On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change, *Language* 65 , pp.31-55.

引用文献

- 北原保雄・久保田淳（編）（2003）『日本国語大辞典第2版』小学館．
- 小西友七・南出康世（編）（2001）『ジーニアス英和辞典第3版』大修館書店．
- 阪倉篤義（校訂）（1970）『竹取物語』岩波文庫．岩波書店．
- 坂本ナンシー・坂本示洋（2004）*Polite Fictions in Collision*. 金星堂．
- 南出康世・中邑光男（編）（2023）『ジーニアス英和辞典第6版』大修館書店．
- 山口秋穂・秋本守英（編）（2001）『日本語文法大辞典』明治書院．